

上申書を提出した様子で、その草稿がハーヴァード大学ホートン・ライブラリーに残っている(『フェノロサ資料』所収)。一通は地方の社寺美術品調査の不備、寺僧の無知や私物化などによって美術品が散佚の危機に晒されていることを指摘し、早急に保護措置を講じなければならぬという訴えである。もう一通は博物館が収集を行う上で必要となるリストを完成するためには調査期間を延長したいこと、自分を宮内省に雇い替えして古美術保護および研究の事に専念させて貰いたいことを要請するもので、こちらの要請は直ちに承認され、同年八月一日付で彼は東京大学雇教師の職を免ぜられて文部省兼宮内省雇となった。

岡倉は六月十一日に帰京し、フェノロサも同じころ帰京した。なお、岡倉は同年夏、再度調査に赴いた。これについては『文部省第十四年報』に次の記載がある。実際の出発は八月十一日で、帰京は九月二日であった。

明治十九年七月廿七日 曩ニ本邦美術品保存法ノ事ニ付宮内省ト商議スル所アルニ因リ文部属岡倉寛三ニ京都、大阪、滋賀、和歌山四府縣ニ出張ヲ命シ該地方ノ社寺ニ藏スル美術品ヲ検査シ之ヲ保存スルノ處置ヲ爲サシム

なお、岡倉は今回の調査の報告書である「美術品保存ニ付意見」(国学院大学梧蔭文庫蔵。平凡社版『岡倉天心全集』第三巻所収)を提出している。梧蔭すなわち井上毅は明治十七年七月に設置された宮内省図書寮の初代図書頭(明治二十一年二月九鬼隆一と交替)であった。

この報告書の中で岡倉は、古美術保護については宮内省が主導権を握り、その資力と権力をもって古美術品を収集し、保護行政の効果あげなければならないと主張し、収集の際の参考として彼が調査した美術品および古書の日録を示している。岡倉の保護行政に対する考えは、美術局設置運動の項で述べたように、文部省に美術局を置いて保護行政もその管轄下に置くことであったが、この報告書ではそれを宮内省管轄下に置くべきであるとしており、以前と異なる考えを示している。それはあるいは宮内省が保護問題に対して非常に積極的姿勢を示し始めたことに関連があるのかも知れない。

#### 加納鉄哉・竹内久一

明治十七、十九年の古社寺調査の際に岡倉やフェノロサと接触したことが機縁となって美術学校設立準備に参画し始めた人に加納鉄哉と竹内久一がいる。鉄哉は古美術品模造の達人で、鉄筆画と称する独特の彫技でも名を知られ、佐野常民と特に親しく、その庇護を受けていた。また、竹内久一はもとは牙彫を業としていたが、明治十四年にそれを止めて鉄哉の弟子となった。翌十五年十月、師弟ともども時勢に感じて古美術研究を志し、奈良へ向けて東京を發つた。以来、多く奈良において古社寺を巡り、土地の事情に通じていたので、岡倉やフェノロサにとってはよき案内役となったのである。鉄哉は相当の奇人だったようだが、フェノロサは遺稿の中で

彼は芸術的価値をかなりよく知っており、自費で過去一年半最

初の系統的古寺調査を行い、奈良当局に知られていない多くの名宝を発見しました。我々の調査における彼の自発的協力は、我々にとって既に非常に貴重なものとなっています。

〔図画取調掛社寺宝物調査(1)奈良からの報告〕『フェノロサ資料 I』所収)

と述べ、また、奈良では「骨董趣味から区別される美術的優秀性をいささかでも理解する者」は一人もいないが、唯一の例外は鉄哉であるとし、高く評価している。この鉄哉が夢殿開扉の劇的瞬間に居合わせたことは既に述べたとおりである。

竹内久一も岡倉らの案内役を勤めながら、大いに知見を広めた。彼は晩年に当時を回顧して次のように語っている。

其の頃〔明治十七年頃〕、フェノロサ氏だの、岡倉寛三君だのが奈良の方へ見えて、それを案内かたがたお供をして、時々自分の意見も吐いた。

〔木彫を志せる動機と奈良行の顛末〕『書画骨董雑誌』第四十七号。明治四十五年四月刊。所載)

自分が奈良で修業中、東京から種々と友人が見物に見えてその時毎も自分は案内の役をつとめた。それや之れやが美術学校と私を結びつけて了つた。其頃私は日本へ輸入された西洋の美術品を見る度に感じた事がある。西洋は西洋の風がある、それを日本人が無暗に崇拜して、日本美術をけなすのは善くないと。元來日本の佛像そのものも印度から来たものだけども、

日本へ来て日本化された佛像になつて居る。直ちにあちらの風を注入するのは考へ物である。それが日本化されたる藝術となつた場合に始めて感賞の價値があるのである。無暗と西洋趣味に没頭するのは好まない。何處までも研究的態度を持つて日本美術の特色を巧みに調和せしめて、新しき日本の美術を形成したい。これが私の所感であつた。その考が私をして美術学校に入らしめたのです。

〔先帝陛下と神武天皇〕『書画骨董雑誌』第五十二号。大正元年九月刊。所載)

竹内久一は明治十九年の古社寺調査の際に岡倉と特に親密になつた。調査から帰つた岡倉は、東大寺真言院に居た久一に次のような書簡を送り、貧窮にめげず研究を続ける彼を激励し、援助を約束している。

拜啓益御多祥欣賞之至ニ御座候。然レハ小生事去ル二日無異着京候間御休被下度候。出発〔欧米視察〕の儀ハ来月二日出航北京号ニ有之、日々準備ニ追ハレ御無音打過候。申迄もなき事ニ候へ共心中の大事ハ呉々も堅固ニ護持相成、花々敷御働きの程眺ヲ決テ相待申候。小生も可及丈の力ハ相添申參候。

十月八日 覚三

久遠大兄 坐右

〔岡倉天心全集〕第六卷。昭和五十五年十一月。平凡社刊。所収)